

幕末太陽傳（1957）

メディア 映画
ジャンル コメディ ドラマ 時代劇
製作国 日本
色彩 B&W
時間 110分
初公開日 1957/07/14
公開情報 日活
映倫 G
リバイバル 2011/12/23 [日活]（デジタル修復版）

【解説】

古典落語の“居残り佐平次”を下敷きに、幕末の品川の遊郭に居座り続ける、お調子者で狡猾なひとりの男を描いたコメディの傑作。「雁の寺」「洲崎パラダイス・赤信号」の川島雄三監督、フランキー堺主演。

明治維新を目前にした江戸の品川。ここに北の吉原と並び称される遊郭があった。その遊郭の一室で、勘定を気にする仲間3人を尻目に呑めや歌えの大騒ぎをしている男こそ、主人公佐平次。この男、実は懐には一文の銭も持ち合わせていないのだが……。

「居残り佐平次」以外にも「品川心中」「三枚起請」「お見立て」「明烏」といった落語ファンにはお馴染みの廓噺を随所にちりばめ、リズミカルにして畳み掛けるようなスピーディな展開、それでいてメリハリの利いた演出と、観る者を一瞬たりとも飽きさせない川島雄三監督の代表作にして日本映画を代表する傑作の1本。特筆すべきは主役の佐平次を演じたフランキー堺の演技で、その流れるようなムダのない動きは、それ自体ある種の“芸術”の域にまで達しているといっても過言でない美しさを有していた。また、映画が進むにつれて悪化していく佐平次の咳が、明るくコミカルな作品のトーンにあって唯一静かな影を落としているが、常に死と隣り合わせで生きていた川島監督の死生観が垣間見えて印象深い。エピローグ、それまで全編を通してひたすらアクティブだったスクリーンが、明け方近くなり皆が寝静まり、佐平次がこっそり遊郭から抜け出そうとするシーンになって一転、強烈な静けさに包み込まれる。この動から静へのあまりにも見事な転換は映画史上屈指のエピローグではないだろうか。とにかく日本が誇る二人の類い希な天才が高次元で融合して産み落とした奇跡の映画である。

【クレジット】

監督 川島雄三
製作 山本武
脚本 田中啓一
川島雄三
今村昌平
撮影 高村倉太郎
美術 中村公彦 [美術]
千葉一彦
編集 中村正
音楽 黛敏郎 Toshiro Mayuzumi
監督助手 浦山桐郎
遠藤三郎
磯見忠彦

照明	大西美津男		
特殊撮影	日活特殊技術部		
資料提供	宮尾しげを		
	安藤鶴夫		
助監督	今村昌平		
出演	フランキー堺	Frankie Sakai	居残り佐平次
	左幸子		女郎おそめ
	南田洋子		女郎こはる
	石原裕次郎		高杉晋作
	芦川いづみ		女中おひさ
	市村俊幸		奎兵衛大盡
	金子信雄		相模屋楼主伝兵衛
	山岡久乃		女房お辰
	梅野泰靖		息子徳三郎
	織田政雄		番頭善八
	岡田真澄		若衆喜助
	高原駿雄		若衆かね次
	青木富夫		若衆忠助
	峰三平		若衆三平
	菅井きん		やり手おくま
	小沢昭一		貸本屋金造
	植村謙二郎		大工長兵衛
	河野秋武		鬼島又兵衛
	西村晃		気病みの新公
	熊倉一雄		のみこみの金坊
	三島謙		粋がりの長ンま
	殿山泰司		仏壇屋倉造
	加藤博司		息子清七
	二谷英明		長州藩士志道聞多
	小林旭		久坂玄瑞
	関弘美		伊藤春輔
	武藤章生		大和弥八郎
	徳高溪介		白井小助
	秋津礼二		有吉熊次郎
	宮部昭夫		長嶺内藤太
	河上信夫		岡っ引平六
	山田禅二		坊主悠念
	井上昭文		ガエン者権太
	榎木兵衛		ガエン者玄平
	井東柳晴		吉原の附馬
	小泉郁之助		呉服屋
	福田トヨ		新造おとら
	新井麗子		女郎おもよ
	竹内洋子		女郎およし
	芝あをみ		女郎おてつ

清水千代子

高山千草

女郎おうの

女郎おさだ